

諸隊の内膳隊に入隊し、後に健武隊に移っている。明治三年（一八七〇）四月二四日、玖珂郡山代本郷引地峠において、脱隊の罪で誅伐梟首（さらしくび）されている。菊次郎当時二五歳であった。

田原秀吉は、弘化四年（一八四七）鹿野上村の農業勝三郎の弟として生まれ、銳武隊に入隊、明治三年四月二四日、弥益菊次郎と同罪で同場所誅伐梟首されている。秀吉当時二四歳であった。

慶応年間（一八六五～一八六七）の事である。

#### 百姓一揆

当時の農村には災害に備えて積み立てる田穀制度というものがあつた。今の共済制度のようなもので村単位で構成され組織されて各戸が米や金銭（一戸当たり二錢七厘余）を拠出し、それを山口共同会社に送り、積立てを依頼するのである。ある年、代官杉某がこの田穀を私腹したという噂が起こりたちまち野火のごとく広がった。農民は汗と血の結晶である積立米銀を横領されたのではたまらない。怒りは全町に及び遂に西河内の磯右衛門という人が参謀となり、宇之助という人と謀議し、同志を糾合して代官所と庄屋の家を襲撃することに決した。これに賛同した多くの農民たちは蓆旗を押し立て血染の幟を先頭に手に手に竹槍や枋・棒・鎌・鳶口などをひっさげて代官所めがけて行動を開始した。途中同志は増加し、又、「参加せざれば粉碎す」などと口々に罵り嚇したので人々は恐れて得物をもって参加する者も加わって、その数、百四、五十人にも及んだという。

やがて一揆勢は町に入り、龍雲寺を本拠として立て籠り、農民の意中を一番理解している勝間田某氏を押し立てて示威し、代官や庄屋の反省を促した。一方、岩崎家はこの事を大変憂慮し代官杉氏を酒造用の六尺桶の中にかくまりを取め、遂に大事には至らなかったという。

この時の血染めの幟は、今も勝間田家に保存されている。

#### 田原川の戦

明治二年（一八六九）五月七日夕刻、山口諸隊の脱走兵約一〇〇名がひそかに町にやって来た。彼らは町に入ると民家やお寺に入り勝手に宿泊することを決めその上乱暴を働いた。なかでも勝間田家に宿泊した兵たちは土足で居間に上がった。これを知った西河内の弥吉という人は自分の部落に帰り、脱走兵の乱入したことを触れ歩いたという理由で、捕えられ、梶橋付近で殺されたという。

脱走兵たちは一夜明けた五月八日石州方面へ遁走した。丁度この日はお薬師様の縁日で村人は仕事を休み酒肴を楽しんでいたが、誰が言い出したのか山口から兵隊が攻め寄せるといふ噂が立ち、噂は次々と広がり人々は不安になり、中には荷物を片付けたり、表戸を閉めたりする家も出た。また、一方、防戦を決意し、刀などを持って田原川の土手に陣取るものもあり、町中は大騒動となった。町中の大多数の意見は、昨夜の乱暴を思い防戦のために男子を総動員し、老人も若者も手に刀や銃を持って田原川土手から大町、垂門方面へ防戦のため集結した。この時の田原川土手は異常な緊張がみなぎっていたという。

山口兵はやがて今井峠を越してやって来た。馬蹄の響も高く、それぞれ旗さしものをかざした乗馬の兵を先頭に一隊一隊と田原川対岸まで迫って来た。これを待ち受けていた町の人々は一斉にねらい撃ちを始めた。ねらい撃ちは見事先頭の兵士に命中しもどり打って落馬した。山口兵は予期しない事態に驚いて、遙か後方に退いてしまった。

ちょうどこのころ、冨谷原の畠には無数の雀おどしが立てられていたが、これを見た山口兵は村人勢が多数であると勘違いをし、恐れをなして田原橋より入ることを断念し、今井より柏原に入る道に変更した。山口兵は柏原に入るや中山観音堂から大筒で攻撃をしかけて来た。目標は漢陽寺であつたらしく、山門の扉には四・六センチほどの弾痕が残っている。

この戦は小半刻続いたが村人たちはこの山口兵は昨夜の脱走兵の追討に来たことを知り、また、山口兵たちも昨夜



の脱走兵と同じに見られたことを知り、双方戦いの無用を悟って戦闘は停止された。そして山口兵は石州路へ向かったと言う。また、一説には脱走兵たちが村人を煽動し、追手の兵と戦わしておいて自分たちの逃走する時間を稼いだとも伝えられている。この戦闘で先頭の兵士を撃ち落とししたのは下市の富田屋亀吉といわれ、後に捕えられて本郷の牢屋に送られたという。また、当時の漢陽寺住職は、脱走兵の武器を預かっていたという理由で重罪に問われたが、かつて住職に恩顧を受けた某僧が師の難を知り、罪を背負ったと伝えられている。

(注) 諸隊の脱隊騒動は、版籍奉還後に実施された兵制改革に不満を抱いた隊士によって引き起こされた事件である。

戊辰戦役が終結し隊士は統々と帰藩したが、明治維新を遂行した毛利藩財政は極端な窮乏に追いこまれていて、采地召上げなど禄制改革を実施していた時である。当然のように諸隊の帰藩は膨大な費用を必要とすることとなって、藩は明治二年十月八日、奇兵隊と振武隊の兵士二二五〇人を東京常備軍とし、その他の諸隊は解散するという兵制改革を断行した。ところがこの常備軍の選抜にもれた諸隊隊士は大きく動揺し、遂に脱隊して三田尻に集結した。脱隊した諸隊は小郡・徳地・鯖山などに砲台を築き、藩政府と対峙する結果となった。脱隊騒動解決のため帰藩した木戸孝允・井上馨らの進言によって脱隊兵の武力による討伐が決定され、明治三年二月八日討伐が開始されたが、僅か三日間で脱隊騒動は鎮圧された。しかし、脱隊諸隊はなおも徳地・花岡・石州附近に残り抵抗したが、遂に藩外へ逃亡したと記録にある。田原川の戦もこのような背景によって引き起こされたものであろう。

練兵場跡 維新前、当時の不穏な状況に備えて毛利藩は農兵制度を主張し、本町でも若者の中から希望者を募集し、身体強健で意志の堅い者を選抜し、冨谷原(元高校、現グリーンハイツの地)に練兵場を造り、訓練

を行なった(鹿野町からの諸隊士として一七名入隊している。第五章第一節参照)。

杉ノ河内の大鰻 今からおよそ八〇〇年くらい前のことである。ある年の夏の初め杉ノ河内で大斤量の釣に猫をさして餌にし大鰻を釣り上げた。余りにも大きいので仁保津、赤山、鯖、上角、巢山、升谷、三作

の七ヶ村の人に分け与えた。ところがそれを食べた村中の人々が疫病にかかって多くの人が死ぬ騒ぎが起こった。その原因が鰻を食べたための神の祟りであると気付いた村人たちは大山祇神を祀る今井の三嶋神社へ参拝し、疫病退散を祈願した。そして平癒すればそのお礼に一三年に一度、神舞を奉納して大山祇神をお慰めすることを誓った。

その年の秋には神様の怒りも解け、大豊作となり、疫病も治ったという。

(注) 本稿は「徳地の昔ばなし―鰻を食べない村―」その他を元にした。本誌第一章の中の仁保津神楽の由来との異同が面白いと思ひ引用させていただいた。仁保津方面は元串村(徳地町串)の一部であった。

## 一一 地名の由来

### 大字鹿野上

鹿野 古書には賀野と記したものが多く、そのいわれに二説があり、一は二所神社の社伝に大向(徳山市大向)の神がこの地をさして「彼地を守ろう」とおせられたところから賀野の地名が生まれたというのであり、他の一は漢陽寺草創記にこの地に鹿苑菴と呼ばれる庵があり、人々は鹿野苑と称していた。これから地名を鹿野と呼ぶようになったが、昔は賀野と書いていたという。しかし両説が必ずしも正しいとは信じ難く、あるいは付会ではないかという。温見 天保十三年の記録には温身とある。三方を山に囲まれ、南方が開けて日受けがよく温かいところからという。大地庵 地下上申にも風土注進案にも大智庵とあり、昔この地に大智庵という庵があったところからという。